

# Washington Women's Dialogue

日本人女性がトップダンサーとしてワシントンバレエ団で活躍している。ワシントンバレエ団は国際色豊かで、年齢も多様で個性豊かなバレエ団だ。階級がなく比較的少人数なので、若くてもいろいろな作品や役を演じるチャンスがめぐってくる。そんなワシントンバレエ団でのびのびと活躍している日本人プリマ3人のインタビューが実現しました。日本人初のプリンシパルとして数々の主役を務めた大貫真希さん、ブノワ授賞式のガラ講演も踊った木村綾乃さん、KDDIのCMに出演した宮崎たま子さんにお話を伺いました。



## 宮崎たま子さん

東京都出身。5歳よりバレエを始める。2002年YAGP第1位。カナダ・イタリア留学、コロンビアクラシカルバレエを経て2013年ワシントンバレエに入団。2015年にはKDDI(株)によるウェブCM「SYNC DREAMS〜子どもたちが、夢に近づく特別授業〜」に出演した。



## 木村綾乃さん

京都市出身。9歳からバレエを学び15歳で単身イタリアに2年間留学、2011年にワシントンバレエ団入団、2017年度ブノワ授賞式(バレエ界のアカデミー賞)のガラ公演ではワシントンバレエ団のブルックリン・マック(ノミネート)のパートナーを務める。2018年ロミオとジュリエット、2019年眠れる森の美女など主役を務めた。



## 大貫真希さん

3歳でバレエをはじめ、スィスローザンヌ国際コンクールセミファイナリスト。ドイツ留学を経てユースアメリカグランプリコンクール(YAGP)決勝進出。カナダ留学を経て2004年にワシントンバレエ団に入団。日本人最初のプリンシパルダンサーとして海賊、白鳥の湖、ジゼルなど多数の作品の主役を務めた。

## ーまずバレエを始めたきっかけを教えてください

(大貫) 6歳のお友達が習っていて、彼女の発表会を見に行ったことがきっかけです。3歳の時それを見てお母さんに「(私も)やりたい」といって、家族の中で初めてバレエを始めた。

(木村) 9歳の時、姿勢が悪かったのをそれを矯正するという理由もあり母にすすめられて。近所の友達がやっていて「やってみようかな」と思ったことがきっかけです。

(宮崎) 母がミュージカルコースのある大学で働いていて、赤ちゃんの時から仕事場へ連れていかれ、踊っている大学生たちをいつも見ていて「(私も)やりたい」と思った。ダンスの基本は「バレエだ」と母の頭にあったのでそれでバレエ教室に行くようになったのです。

Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship (JSIE)はワシントンDC登録の503c3非営利団体です。JSIE主催のWashington Women's Dialogueでは、自分らしくグローバルに活躍する人を応援します。詳しくはこちら。 [www.jsie.net](http://www.jsie.net)

## ーバレエで得意なことは何ですか？

(木村) 一度見た振付をすぐ覚えることができる。誰かが体調を崩したりして、突然その日に「君踊ってくれる？」と言われピンチヒッターを務めることもある。技術的なことやメンタル面を含めこれまで踊ってきたものを出す自信はある。チャンスがきたら踊れる、一度見たらすぐ自分のものにできることが強みですね。

(宮崎) 集中するとすごくのめりこむところですね。バレエだけでなく最近編み物にはまっていて、一回始めると最後までとことんやるタイプです。

(大貫) 子供のころからジャンプならなんでも得意です。ひざを怪我した後はちょっと難しいけど、それでも一番得意な分野です。

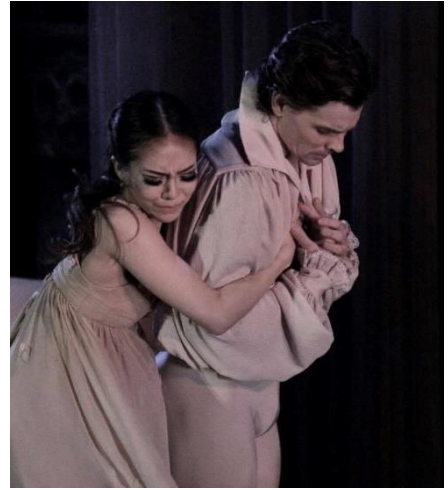


## ーそれぞれの道を経てワシントンバレエ団に集まってきたわけですが、これまで演じた中でどの作品が一番印象的ですか？

(木村) 全幕作品ですね。初めて踊った全幕作品より、感情や技量も心技一体に現れた2018年の「ロミオとジュリエット」。特にジュリエットの心の動きを舞台上で表現することができ、プリマとしての達成感も感じる事ができた。

(宮崎) マーキュリー・ハーフライフというQueenの音楽作品。ライセンス問題で今後再上演されることはないのが残念です。振付師トレイ・マッケンタイヤーさんの振付で、普通のバレエ作品では味わえない、観客とダンサーのエネルギーの一体感と皆で舞台を作り上げていく感覚が今でも忘れられない。

(大貫) クラシックや全幕ものの場合、一つ一つ思い入れがあります。特に、怪我で8か月バレエを休み復帰直後に主演したロミオとジュリエットは思い入れがあります。舞台から離れていたのが恐怖もあり、やっと復活できるという思いと、本調子ではない分表現力で補うという気持ちが入り混じってましたね。



## ープロになろうと思ったのは？

(木村)15歳の時に出場した国際コンクールで奨学金をもらったことがきっかけです。イタリア留学などで国外にでて、プロの方たちを間近に見て「プロになりたいな」と思った。

(宮崎) 私も国内外のコンクールに出るようになってから。同じように頑張ってるライバルがローザンヌなど皆海外留学を目指しているのを見て、私も海外目指したいと思った。小学校4年生から国内のコンクール、中学1年生の時に海外のコンクールに初めてでた時に1位をもらった。決選がNYだったので外国人の先生が周りにいて海外が身近に感じた。そこから「夢だけでおわらせない」と現実的に考えるようになった。イタリアの留学先とワシントンバレエ団で綾乃ちゃんと一緒にになった。不思議な縁を感じます。

(大貫) バレエの道で生きていくと決めたのは12歳の時。それまで予選も通らなかったのに小学校5年生で別のバレエの教室に変わった途端、すぐ賞がとれた。その時ロシアの先生にすごく気に入られて、指導を受けたりしているうちに「もしかしたら私にもできるのでは」と自信がついた。日本のバレエ団では給料がもらえないので、必然的に職業として生計を立てていくなら海外。中学生の時から留学すると決めていた。





# Washington Women's Dialogue

—皆さんは主要な作品でソリストや重要な役を演じるなど第一線で走り続けていらっしゃいますが、それを継続できる秘訣はなんですか？

(木村) 尊敬できる友人やダンサーを持つことだと思います。一人だけで続けるのは大変。周りから刺激をもらうことが大事ですね。応援や刺激を受けて切磋琢磨していくことで、周りに助けられていると思う。2018年に婚約して、日常のパートナーも頼れる存在ができ心が充実していることもプラスです。

(宮崎) あきらめないこと。あきらめてないからここまでやってきた。続けてきたから今がある。22-23歳の時、すねを疲労骨折したことがあって、半年バレエができなくなった。その時バレエから少し離れることになり、その間改めて自分を見つめなおすことができ、再開したときに「もっとやりたいな」と思った。あとオンとオフのメリハリをつけ、気持ちの切り替えができることが大事だと思う。



(大貫) ワシントンバレエで15年目となり、主役の立場で作品を背負うという責任感を痛いほど理解しています。皆が納得する技量を主役が示せないと舞台の一体感が生まれません。技術面では絶対レベルを落としたいくないという完璧主義。練習の期間にいろいろ勉強したり、人のビデオを見たり、プロセスに投資すればするほど舞台での達成感が大きい。うまく踊れるときはミラクルの感覚がある。お客さんも気にならないくらい、いるのを忘れるくらい入り込んでいる。自分が白鳥になっている、そういう風に踊れる舞台は、自分も気持ちいいんです。あと、メンタル面で安定していることが大事だと思います。メンタルで弱いとダンサーは弱い。私はマイペースなので、人のことを気にしない方です。人のことを気にしだすと、余計なストレスやフラストレーションたまる。自分との闘いなので、自分に集中して地道に自分が努力して、比べるのは自分と自分です。



—皆さん素晴らしい経歴をお持ちですが、これまでどんなことに苦労しましたか？

(木村) 言葉の壁。15歳で初めて親元を離れイタリアに留学した時、英語も通じなくてイタリア語もわからなかった。バレエ学校では日本人たった一人だけ。誰も助けてくれない、インターネットもない時代に、電話もお金がかかるのでなかなかできなかった。人生の中で本当に苦労した時期です。

(宮崎) 身長の高さでは苦労した。オーディションさえ受けさせてもらえないこともあった。技術的には上手だけど身長が足りないから、と断られた。ヨーロッパは特に厳しくて最低162センチ以上身長がないとバレエ団には入れない。

(大貫) 一番最初の壁は17歳でドイツのシュツットガルトに留学した時。英語も大してできずドイツ語もできない上、寒いし学校も厳しくて。たたかれたり、できないなら出ていけという厳しい教え方で先生が怖かった。ストレスがたまり3か月で10キロ太ってしまいました。耐えられなくて3か月で日本に帰国。一方、日本にいたときから、常にコンクールに出れば優勝という同じくバレエダンサーの兄と比べられて。海外にきて一人になる方が楽でした。でも、兄を目標にいつも背中を追っていたから、高みを目指すことが出来たと思う。



——今楽しいことは何ですか？オフには何をしていますか？

（木村）2018年に婚約したこと。日常のパートナーも頼れる存在、心が充実していると違う。オフには映画をみたり、普段食べられないものをたくさん食べたりしてくつろぎます。

（宮崎）あとオンとオフのメリハリをつけ、気持ちの切り替えができることが大事だと思います。今は犬と遊ぶことで、一緒に走ったりして切り替えができる時間になっています。オフには、友達を呼んだり、遊びに行ったり、家であみものしたり。あと、ミュージカルのように歌いながら踊るビデオクリップを制作しています。香港と日本で撮影したりしました。バレエから離れた感じで、オンとオフを大事にしています。

（大貫）昨年結婚して、休みの日にリラックスして普通の生活ができることがうれしい。バレエを24時間考え続けるとストレスがかかるので、リラックスすることが大事です。



（宮崎）歳を重ねるにつれ身体が固くなるのが早くなったと思います。以前は1週間踊らなくても平気だったのですが、今はストレッチしていないと自分の中でも身体の変化に気がきます。真希さんは私たちの中でも大先輩で、先に進んでいる彼女がいるから頑張れるんです。今年の目標は、マーキュリーの振付けをしたマッケンタイヤーさんが今年最後のワシントンバレエ団のプログラムとして、新たにつくる作品があるので、もしできればそれに出たいと思っています。元気がとりえなので、きらきらした踊りを皆さんに見てもらいたい。

（大貫）小さい頃から一流のダンサーを見てきたので、主人公がどんな踊りをするか自分の中で明確に描けます。高い技術力を要求される作品には常に最大限のものを出していく。フィジカルに衰えてくる部分を違う踊り方や表現力でカバーしていきたい。若い頃よりも色々な経験を重ねてきたのでそれなりの表現ができるようになったと思います。自分のバレエ観があるので、もっといい踊りをできるよう努力して高みをめざしていきたいです。綾乃さんとたま子さん二人はかわいい後輩。刺激をもらったり愚痴を聞いてもらえる仲です。

——今後ますます皆様のご活躍をお祈りしております。また次の舞台を見に行くのが楽しみです。

（取材協力：阿部嘉代子さん）  
このインタビュー記事はさくら新聞2019年3月号に記載されました。

——これからの抱負を教えてください。

（木村）30歳なのでいろいろ考えます。バレエ一つに絞るという道もあるけれど、ほかの分野もやってみたいし、若手の育成もやってみたい。環境を変えたい、違うことをやってみたいという思いもあります。次のステップや、自分が何をしたいか考えたいと思っています。衝撃をうけたのは、踊るよりもストーリーを伝えるハンプルグバレエ団の「椿姫」。「椿姫」のような今までのダンサー人生をすべて出せる作品をやってみたいと思っています。

[www.jsie.net](http://www.jsie.net)

Japan Institute for Social  
Innovation and Entrepreneurship

JSIE  
Japan Institute for  
Social Innovation and  
Entrepreneurship